

100年前から紡いできた本院の人道支援



大阪赤十字病院 国内外の救援活動 2017

International Medical Relief Department



今日も、あしたも、100年後も

国際医療救援部 <http://www.osaka-med.jrc.or.jp/aboutus/international/index.html>

熊本地震 2016 緊急救援 (本院の対応)

2016年をご存知のとおり4月に熊本で地震が発生し、大きな被害が出ました。大阪赤十字病院では発災当日、17名の職員と、保有するフィールドホスピタル (ホスピタルdERU) のうち外来棟、レントゲン、手術室と、子どものこころのケアのためのキッズルームを、トラック3台

とマイクロバス1台で運び、南阿蘇・長陽地区で最大の避難所となっていた、長陽中学校体育館前に展開しました。その後同地にて1カ月間診療を継続、熊本赤十字病院への病院支援と併せて合計84名の職員を派遣しました。



現地の調整会議で本院は南阿蘇・長陽地区を任せられました

本院の国内災害を担当する国際医療救援部国内救援課には、普段は海外の紛争や災害を担当している国際救援課はもちろん、院内の多くの部署が応援に入り、昼夜休日関係なく非常体制をとり、医療救護のマネジメントと後方支援を行いました。

われわれの支援は5月末で終了しましたが、現地はまだまだ復興途中です。一日も早く、熊本の皆さまが以前の生活に戻れますよう、大阪赤十字病院職員一同こころよりお祈りいたします。

以下現地での当院の活動の報告です。

※活動詳細は、本院ホームページでもご覧になれます。

<http://www.osaka-med.jrc.or.jp/aboutus/international/report02.html>

ホスピタルdERUでの診療

南阿蘇での調整の結果、本院は長陽地区の医療を担当することとなりましたが、この地区は、唯一の医療機関であった立野病院が崩壊したために医療施設がない状態でした。地元と調整を行い、南阿蘇最大の避難所となっていた長陽中学校体育館前に、外来棟、レントゲン室、手術室を展開し、約1カ月の活動で1,000名以上の被災した方々を診療しました。

ホスピタルdERUは、自前で発電機、蓄電池を持っており、停電時でも



子どもの診療を行う本院小児科医



ホスピタルdERUの一部を体育館前に展開



東日本大震災以来、久しぶりに非常体制を敷いた本院国際医療救援部

テント内の照明や医療機器を動かすことができます。外来棟では超音波検査や血液検査、またレントゲン室ではレントゲン撮影も行いました。手術室では、幸い大きな手術をすることはありませんでしたが、歯科医師会の巡回で、歯の治療をするなど診療場所を提供しました。



外来棟テント内部



歯科医チームの処置用に手術室を提供

野外レントゲンシステム

発災からしばらくの間は、停電などにより、長陽地区のみならず、南阿蘇全体でレントゲンを撮影できる医療施設がありませんでした。本院が搬入した野外レントゲンシステムは発電機、蓄電池も備えており、ホスピタルdERUを訪れた患者さんだけでなく、他の施設、団体からの依頼も受け、1カ月で50件余りのレントゲン撮影を行いました。レントゲンは、積んできたトラックのコンテナをクレーンで降ろし、このコンテナをレントゲン室として稼働します。コンテナ周囲には一定の距離を置いてコーンとバーで仕切りをして、通行人が被ばくしないように配慮しました(写真1)。

ここで撮影した画像は、無線で外来棟の診察室のパソコンに飛ばし、医師が見ることができます。本院では1995年の阪神淡路大震災で、

院内のポータブルレントゲンを神戸まで運搬し、現地の病院へ入れて撮影したことがあり、これが日本で最初の被災地におけるポータブルレントゲンの運用ではないかと思われませんが、今回のシステムはそれを発展させ、仮設診療所と連動して運用しました。



写真1: コンテナ



レントゲン室(コンテナ)内部



本院診療放射線技師が撮影



画像調整をして、診察室に無線で送る

キッズルーム



キッズルーム正面

途上国で起こった災害では子どものこころのケアも重視されており、われわれの海外救援でも、医療だけではなく、チャイルドフレンドリースペースと言って、子どものために遊べるスペースをテントで作し、一緒に遊んだり、紙

芝居をしたりします。

今回ホスピタルdERUを設営した長陽中学校は、体育館が避難所になっており、また、運動場は車中泊のための被災者の車で埋め尽くされ、子どもが遊べるスペースがありませんでした。そこで、診療所とは別に子ども用テントを設営することとし、名称をわかりやすいようにキッズルームとして4月29日から運用を開始しました。

キッズルームは、子どもだけでなく保護者も休めるスペースとして重宝されました。5月16日の撤収までに212名の児童と62名の保護者に利用していただきました。われわれ要員にとっても、子どもと一緒に遊ぶ時間は、救護の合間の癒しの時間となりました。



他のこころのケアのNGOとも協働



他県から来たボランティアも参加



救護の合間のわれわれの癒しにもなりました

国内救護(2000年以降分).....

本院の国内災害医療救護は、1909年の大阪北区大火から始まり、関東大震災、室戸台風、阪神淡路大震災など100年以上の歴史と経験があります。この間、戦時救護もありました。

以下は2000年以降の派遣です。救護班の派遣は、災害が発生したとき

の医療救護と、公的なイベントでの臨時救護(臨時救護所を設営して病気のやけがをした人の手当てを行う)の2つがあります。2000年以降では、災害救護にのべ258名、臨時救護に237名、合計495名の職員を出動させています。

●本院職員の国内救護派遣(2000年～) 1909年から始まった大阪赤十字病院の国内救護のうち、2000年以降の派遣実績です。

派遣期間	活動形態	災害/事業名	派遣地	派遣者職種(救護班数など)
1 2000年10月	臨時救護	御堂筋パレード 救護所	大阪府大阪市	医師1、看護師2、事務1名
2 2001年10月	臨時救護	御堂筋パレード 救護所	大阪府大阪市	医師1、看護師2、事務1名
3 2002年3月	臨時救護	キリンチャレンジカップ2002	大阪府大阪市	救護班6チーム 職員30名
4 2002年10月	臨時救護	御堂筋パレード 救護所	大阪府大阪市	医師1、看護師2、事務1名
5 2003年10月	臨時救護	御堂筋パレード 救護所	大阪府大阪市	医師1、看護師2、事務1名
6 2004年5月	臨時救護	国際ロータリー2004 国際大会	大阪府大阪市	看護師8名
7 2004年10月～11月	災害救護	新潟県中越地震	新潟県小千谷市	救護班2チーム 職員12名
8 2004年10月～12月	災害救護	新潟県中越地震 ころのケア	新潟県小千谷市	ころのケア要員 1名
9 2004年10月	臨時救護	御堂筋パレード 救護所	大阪府大阪市	医師1、看護師2、事務2名
10 2005年4月	災害救護	JR福知山線列車事故	兵庫県尼崎市	医師1、看護師2、事務1名
11 2005年7月～8月	臨時救護	EXPO 2005 愛知万博	愛知県瀬戸市	医師1、看護師1名
12 2005年10月	臨時救護	御堂筋パレード 救護所	大阪府大阪市	医師1、看護師2、事務1名
13 2006年10月	臨時救護	御堂筋パレード 救護所	大阪府大阪市	医師1、看護師2、事務1名
14 2007年7月	災害救護	新潟県中越沖地震	新潟県刈羽市	救護班1チーム 医師2、看護師3、事務2名
15 2007年8月～9月	臨時救護	IAAF 世界陸上選手権	大阪府大阪市	救護班24チーム 職員96名
16 2007年10月	臨時救護	御堂筋パレード 救護所	大阪府大阪市	医師1、看護師2、事務1名
17 2008年6月	臨時救護	G8 財務相会合	大阪府大阪市	救護班3チーム 医師3、看護師3、事務3名
18 2008年10月	臨時救護	ハート大阪秋まつり	大阪府大阪市	救護班2チーム 医師2、看護師4、事務2名
19 2009年8月	災害救護	台風9号大雨災害	兵庫県佐用町	救護班1チーム 医師2、看護師3、事務2名
20 2009年8月	災害救護	台風9号大雨災害 ころのケア	兵庫県佐用町	ころのケア要員 1名
21 2009年10月	臨時救護	御堂筋Kappo 2009 救護所	大阪府大阪市	医師1、看護師2、事務1名
22 2010年10月	臨時救護	御堂筋Kappo 2010 救護所	大阪府大阪市	医師1、看護師2、事務1名
23 2011年3月～4月	災害救護	東日本大震災(宮城)	宮城県仙台市	救護班6チーム
24 2011年3月	災害救護	東日本大震災 病院物資支援	宮城県仙台市	事務3名
25 2011年4月～5月	災害救護	東日本大震災(岩手)	岩手県山田	救護班11チーム
26 2011年3月～2012年3月	災害救護	東日本大震災 病院支援	宮城県石巻市	医師ほか22名
27 2011年3月～5月	災害救護	東日本大震災 ころのケア	岩手県宮古市	ころのケア要員5名
28 2011年5月	災害救護	東日本大震災	岩手県大槌町	介護福祉士1名
29 2011年8月	災害救護	台風12号水害	奈良県吉野町	救援物資配送
30 2011年10月	臨時救護	御堂筋Kappo 2011 救護所	大阪府大阪市	医師1、看護師2、事務1名
31 2012年3月	臨時救護	大阪サイクルイベント 救護所	大阪府大阪市	医師4、看護師8、事務2名
32 2012年10月	臨時救護	御堂筋Kappo 2012 救護所	大阪府大阪市	医師1、看護師2、事務1名
33 2013年3月	臨時救護	天王寺区避難所運営訓練 救護所	大阪府大阪市	医師1、看護師2、事務2名
34 2013年4月	臨時救護	御堂筋Kappo 2013 救護所	大阪府大阪市	医師1、看護師2、事務1名
35 2014年10月～11月	災害救護	東日本大震災・避難者健康調査事業	福島県いわき市	看護師1名
36 2015年3月	臨時救護	あそぼうさい in 四天王寺	大阪府大阪市	医師1、看護師5、事務5、その他2名
37 2015年5月～6月	災害救護	東日本大震災・避難者健康調査事業	福島県いわき市	看護師1名
38 2016年4月～5月	災害救護	熊本地震救援	熊本県南阿蘇	救護班9チーム、職員83名
39 2016年4月～6月	災害救護	熊本地震救援ころのケア	熊本県南阿蘇	//
40 2016年5月	災害救護	熊本地震病院支援	熊本県熊本市	看護師1名

国際ソロプチミストアメリカ・日本中央リジョン様の30周年記念事業奉仕先に選ばれました。

国際的な支援団体のひとつである、国際ソロプチミストアメリカ・日本中央リジョンが30周年を迎えるにあたり、30周年記念事業奉仕先として本院国際医療救護部が選ばれました。本院の長年の国内外における救援活動をご評価いただいたものと感謝申し上げます。

いただいたご寄附は、ソロプチミスト様の支援の趣旨に沿って有効に使わせていただきます。



2016年 院内災害訓練

職員は
徒歩か自転車で
自宅から登院

前代未聞の徒歩参集訓練!

● 休日早朝に発災!!

言うまでもなく災害はいつやって来るのかわかりませんが、病院にとって最もやっかいなのは、深夜や休日にかかる場合です。病院には常に入院患者さんがおられますので、普通の会社と違って深夜や休日でも比較的職員がいる組織ですが、それでも休日早朝となると、院内にいる職員の数は平日の日勤帯の約5分の1になります。

それに加えて、本院のように大都市の中心部にある病院では近隣に住んでいる職員が少なく、公共交通機関が止まった場合の登院が大問題になります。道路規制もされますから自家用車も使えません。しかも、実は休日と平日深夜を合計した時間は、1年を通してみると平日日勤帯の時間の合計の2倍以上、つまり、災害は病院に人のいない時間に起こる確率が高いわけです。

本院はご存知のように毎年10月1日に大阪市消防局、大阪府警察、陸上自衛隊など、防災関係機関とともに大規模な院内災害訓練を行っています。2016年は10月1日が土曜日でしたので、実際に職員が自宅から徒歩もしくは自転車で登院し、模擬被災者の対応を行うという、前代未聞の訓練を行いました。



1階ロビーを外傷(中等症)エリアに

10月1日は午前9時に上町断層直下型地震発生という想定で、職員は実際に地震が起こったときと同様に、まず家族の安全確認と自宅の被害確認を行った上で、徒歩もしくは自転車で登院としました。当日勤務で病院にいた職員が合計199名、



自家発電で暗い2階災对本部に参集してくる職員

発災から90分以内に登院できた職員は188名でした。

医師、看護師は比較的早くに登院できたものの、事務、放射線技師、検査技師などの職員は遠方に住んでいる場合が多く、なかなか集まら



軽症者は外にテントを立てて診る

ず、職種間で差があり、レントゲンや検査に制限はあったものの、2005年から毎年実践形式での訓練を行っているおかげで、問題点はいろいろありましたが、致命的な混乱はありませんでした。

今回の訓練で実際に徒歩や自転車で自宅から来ることで、事前に考えていた以外の問題に各職員が気づくことができました。休日に職員が少ないという現状は今後も変わらないため、休日発災のときは少ないなりに動けるよう各部署が認識し、また、今回明らかになった問題点を整理、解決していきたいと思います。



検査部:私服で登院、ゼッケンだけ付けて業務



救急センターが重症エリアに



模擬被災地(看護学校グラウンド)



地下に遺体安置所を設営。家族のこころのケアも



本院向かいの聖バルナバ病院にも参加いただき、妊婦さんを運び込む



薬剤部:私服の職員も入り混じる

親と子の防災セミナー「災育」 今年も開催!



応急手当ってどうするの?



防災かるた大会はみんな超真剣!

一体験を通して、防災の知識と意識を育もう



AEDを学ぼう

毎年8月第1日曜日に行っている体験型セミナー「災育」も、昨年で8回目となりました。災害とは、親子で防災について考えてもらい、来てもらった小学生が働き盛りの大人になる20年、30年後までを見据えた、地域対象の啓蒙活動で、「災育」という単語も本院の造語です。

2016年の災育は、約200名の病院職員と看護学生がスタッフとしていろいろなブースの運営を行ったほか、災害の趣旨に賛同していただいた大阪市消防局、大阪府警察本部、陸上自衛隊、大阪市水道局、天王寺区役所などの公的機関や、大阪ガス、アベックス、日本セイフティーなどの企業様にも、多くの防災関連のブースを出していただきました。



大阪府警の救助車両



今日はワタシも消防士



自衛隊の手術車両

災育の初年度(2009年)は160名ほどの参加でしたが、年々増加し、昨年は661名の市民が参加され、東日本大震災や熊本地震などの大災害を経て、さらに市民の関心も高くなっていることを実感します。



防災講演会「大阪が被災したらどうする!?!」

Information

2017年も8月第1日曜日に開催します。対象は小学校4~6年生とその保護者です。6月中に本院ホームページや、学校への配布チラシなどでご案内しますので、ふるってご応募ください。参加は無料です。親子で災害について話し合うきっかけにできればと思います。



模擬避難所で非常食の試食

※これらの活動の詳細は、本院ホームページでもご覧になれます。 <http://www.osaka-med.jrc.or.jp/aboutus/international/report.html>

ICRCパレスチナ紛争犠牲者救援事業(パレスチナ・ガザ)

医師

▶ 派遣期間: 2016年4月16日～6月10日

2016年4月から2カ月間、パレスチナ自治区のガザ地区で、赤十字国際委員会(ICRC)の救急医としてパレスチナ紛争犠牲者救援事業に従事しました。ガザ地区はイスラエルとの長い紛争の歴史を持ちます。高い塀で外部との接触を断たれたその環境は“天井のない牢獄”とも表現され、50km×8kmの細長いエリア内には150万人ものパレスチナ人がひしめいています。実は彼らの医療水準は高く、都市部ではCTやMRIを備えた500床を超える規模の病院もみられます。しかし、地区全体に安定した医療を供給するためには、人的資源も物質的資源もあまりに乏しいのが現状です。

私はここで3つの任務に従事しました。1つめは、「効果的な救急医療」事業(EED)の推進です。EEDは5本柱(トリアージ、群眾コントロール、一方向システム、書類の標準化、一般市民への

啓蒙)からなります。2つめは、各施設にて医師・看護師向けの救急外傷治療講習(ER Trauma Course)を開催することです。3つめは、救急隊と救急室間のホットラインシステムを確立することです。主に3つの政府系外傷拠点病院を中心に、これらを実践します。この事業そのものは、2008年に着手されていますが、空爆や内部事情から頓挫した時期もあり、2014年8月の停戦以降、徐々に軌道に乗りつつあります。

現地では、今後のガザの医療を担う若いリーダー世代とも、交流を深めることができました。政治的に不安定な環境にありながらも、彼らは高い情熱と誇りをもって職に従事しています。彼らにとって日本は、戦災や震災を幾度も克服してきた希望の対象であるといわれました。私たちにできることは限られていますが、今後もお互いに高め合いながら支援を続けていきたいものです。



外傷トレーニング



外傷トレーニング参加者



ガザの港

ケニア地域保健強化学業(IHOP)(ケニア・ガルバチュラ)

事務職員

▶ 派遣期間: 2016年4月26日～10月26日

IHOP(アイホップ)事業地であるケニア共和国ガルバチュラ県は、同国北東部に位置し、広大な半乾燥地帯が広がる地域です。

同県はケニア国内のなかでも、とりわけ妊産婦死亡率、新生児死亡率、乳幼児死亡率が高く、また栄養失調や保健医療施設へのアクセスの悪さ、いわゆる家族計画への理解の低さ、医療従事者の介助のない出産、低い予防接種率など、多くの保健医療に関する課題を抱えていました。

IHOP事業では、住民のなかから地域保健ボランティアを選考し育成して、住民を対象とした健康教育や対話集会を開催することにより、地域住民の健康に対する知識や意識を向上し、住民

自身が自らの健康を守るようなシステムを作り上げようとしています。

また、県保健省と協力して医療施設のない村々を巡回し、産前産後健診や乳児健診、マラリアなどの血液検査、栄養状態の評価、投薬や予防接種、補助栄養食品の提供など、さまざまな保健医療サービスを提供しています。

IHOP事業への日本赤十字社の支援は2017年12月に終了し、その後は同県保健省に活動が移管される予定です。地域住民の健康への意識がさらに高まり、事業終了後も良質な保健医療サービスが継続されるよう、ケニア赤十字社は地域住民や政府への働きかけを続けます。



地域保健ボランティアが、演劇を通じて住民に行動変容の重要性を訴える



巡回診療の一環として、栄養士による栄養状態の評価が行われる



村の長老から、赤十字による長年の支援に感謝のことが伝えられた

中東地域紛争犠牲者支援事業(ヨルダン・アンマン)

事務職員

▶ 派遣期間:2016年4月28日~2017年4月27日

国際赤十字連盟とヨルダン赤新月社は、2011年に勃発したシリア紛争によりヨルダンに逃れてきたシリア難民とそのホストコミュニティを対象に、2014年から地域住民参加型保健事業(Community Based Health and First Aid:CBHFA)を共同で実施しています。具体的には赤新月社ボランティアを通じて、首都アンマンを含めた6県の都市部に住むシリア難民やヨルダン人に対し、戸別訪問や学校訪問によって生活習慣病の予防や救急法の普及などの啓発活動を行っています。この事業は日本赤十字社が資金提供をしており、私は事業の管理とサポートのため、現地に1年間派遣されました。

保健衛生のなかでも深刻な問題となっているのが実は日本と同じように、がん、糖尿病といった非感染性疾患です。シリア難民への医療補助は2014年12月をもって打ち切りとなり、無料診療を提供しているのはNGOなどが運営するクリニックや不定期なモバイルクリニックに限られています。特に非感染性疾患は、一旦病気になるとその後の治療費が高額になりますので、予防啓発がなにより重要です。



小学校での衛生促進キャンペーン



戸別訪問中のヨルダン赤新月社ボランティア



©ヨルダン赤新月社
ミスユニバース日本が現地を訪問

また、紹介システムを確立することが今の大きな課題です。一人ひとりが抱える問題に対し、どのように地域のサービス実施機関に紹介するか、他団体との情報共有を行ったり、ボランティアが近隣の機関を訪問したりして、関係を築く形で切れ目のないサービス提供を目指さなければなりません。

シリア紛争の終息の兆しが見えないなか、難民の受け入れを続けているヨルダンにも疲れの色が見え始めており、支援はヨルダン人にも分け隔てなく実施しています。140名近くいるボランティアもヨルダン人、シリア人、イラク人で構成されています。

日常生活が突如として奪われる、あるいは突然の避難を余儀なくされ、家族が離れ離れになってしまうなど、シリア人ボランティアはそれぞれがさまざまな背景を抱えています。国連の支援により、第三国定住のためヨルダンを離れるシリア人ボランティアも少しずつ増えてきていますが、本来の希望は紛争が終わりシリアに帰ることだと、みな口を揃えて言います。

平和が戻ったシリアに戻り、活動を通じて学んだ知識が近所の人たちに提供される日が早く訪れることを願ってやみません。

中東地域紛争犠牲者支援事業(ギリシャ・テッサロニキ)

医師

▶ 派遣期間:2016年8月22日~10月25日

紛争が続く中東を中心に欧州へ押し寄せる難民の数は、昨年1年間だけで100万人を超えます。マケドニアが2016年3月にギリシャ国境を閉鎖したため、EU諸国へ向かう避難民約13,000人がギリシャ側国境に立ち往生しました。ギリシャ共和国と国連難民高等弁務官事務所は、こうした避難民を国内の数カ所のキャンプに移動させて住環境を提供しています。私が難民キャンプを訪れたのは、欧州難民危機が小康状態を取り戻した頃でした。フィンランド赤十字社主導のERU(緊急対応ユニット)は、医師、看護師、助産師、臨床心理士、ロジスティックス、通訳からなる25名程の多国籍複合チームでした。当時赤十字はギリシャ国内に12カ所のERUを展開していました。帯同したチームはこのうち3カ所を統括しており、それぞれ800~1,500人のキャンプで診療を提供していました。

報道にあるとおり、難民数は減少に転じており、一日の診療実数も数カ月前と比べて約半分にまで減少していました。患者の4割は子どもです。風邪や下痢、外傷、高血圧や糖尿病などの治療薬を希望して診療所を訪れます。診療所には最低限の薬剤があるだけで、採血やレントゲン検査もできません。重症患者は近隣の病院へ救急搬送します。

彼らを取り巻く環境は厳しいものでした。難民認定を受けるために必要な国連主導の事務手続きには半年以上を要し、この間彼らは厳しいキャンプ生活を強いられます。すでに長い旅路の果てに、精神的、体力的、経済的に追い詰められた彼らが、なお向き合わなければならない未来は、依然不明瞭です。中東情勢は未だ混迷のなかにあります。今後も長期的な支援が望まれます。



ギリシャ・ネアカバラクリニック



キャンプ内のクリニックで診察する本院医師



ERUチーム

フィリピン中部台風復興支援事業(フィリピン・ボゴ)

事務職員

▶ 派遣期間:2016年10月11日~12月21日

2013年11月、フィリピンのビサヤ地方を台風30号(現地名:ヨランダ)が襲い、現地に大きな爪痕を残しました。日本赤十字社は発災直後から緊急医療救援チームをセブ島北部に派遣し、緊急救援が終わった後もフィリピン赤十字社とともに2014年4月から同地域で復興支援事業を3年間にわたり実施してきました。本事業では、住宅建設、生計支援、地域保健活動、防災研修、学校での給水システム整備などの分野で、セブ島北部に位置するダアンバンタヤン郡の5つのバラングイ※を包括的に支援しました。

私の派遣期間中、現地では2017年1月末の事業完了に向け、事業の効果を高めるためのモニタリングや活動終了時の評価といった事業終盤の活動が慌ただしく行われていました。また、これ

までの活動をフィリピン赤十字社セブ支部および地元地域へ移行するための引継ぎも同時になされていました。そのようななかで私は、事業を終了するために必要な事務手続きや調整面を主に担当しました。台風以前には赤十字の支援が行われていなかった地域ですが、フィリピン赤十字社は地元地域住民と常に連携し、本復興支援事業を展開しました。この事業への派遣を通して、地元地域では台風からの復興や生活再建にとどまらず、将来の自然災害への備えに対して人々がより強く意識するようになっていと感じました。フィリピンの人たちがこれからもコミュニティのなかで力を合わせて災害に備えた社会を築き上げ、その社会が長期にわたって根強く続いていくことを願います。

※フィリピンの最小行政単位、村に相当



小学校で衛生キットを配布



地域での洗濯洗剤づくりを手伝うフィリピン赤十字社ボランティア



フィリピン赤十字社職員と

中東医療支援事業調査 (レバノン・ベイルートほか、パレスチナ・ヨルダン川西岸/ガザ)

医師、看護師

▶ 派遣期間:9月24日~30日、10月15日~23日、2017年2月25日~3月19日

2017年度より、パレスチナ人を対象とした病院支援を行う計画策定の前段階として、当院より医師、看護師が、レバノン国内のパレスチナ人難民キャンプにある4つの病院と、パレスチナ自治区(ヨルダン川西岸、ガザ)の3つの病院の調査に赴きました。

パレスチナ人は1948年の第一次中東戦争を機に周辺国に流入したため、レバノンの難民キャンプもすでに70年近い年月が経過しています。そのなかには学校や病院もあり、いわゆるキャンプというイメージよりも居住区といった方が近い感じです。ただし、レバノン内のパレスチナキャンプに住むパレスチナ人は、現在レバノン国外に出ることが非常に難しくなっており、その結果、医療

においても、この15~20年間の技術や知識の進歩が手に入られていないという問題があります。

一方で、パレスチナ自治区ガザは、なかに入ってしまうと治安は悪くないのですが、パレスチナ人の出入りが厳しく制限されているため、ガザから患者を後送することは難しく、この狭いガザのなかで医療を完結する必要があります。

パレスチナ赤新月社と日本赤十字社との二国間事業で全国の日赤病院から医師、看護師などを派遣して、現地の病院を支援する計画を立てていますが、パレスチナ人の出口のない苦悩を少しでも軽減できるような支援ができるよう努めたいと思います。



パレスチナ難民キャンプ(ベイルート)



キャンプ内の病院



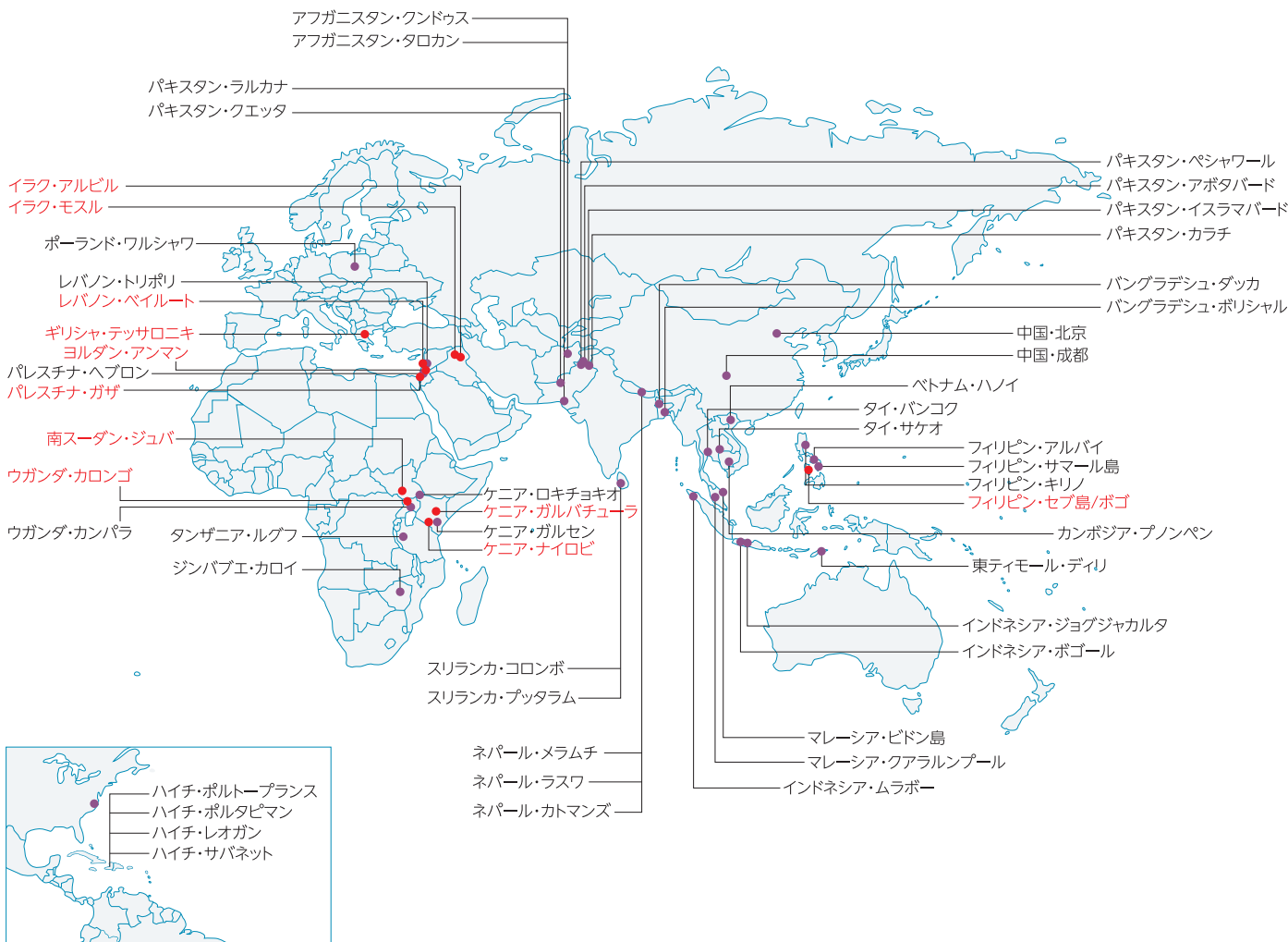
ベカー高原のシリア難民キャンプで

●本院職員の海外派遣(2005年～) 1914年から始まった大阪赤十字病院の海外救援のうち、2005年以降の派遣実績です。

派遣期間	活動形態	災害/事業名	派遣地	派遣者職種	
1 2005年2月～3月	1カ月	緊急救援	スマトラ沖津波	インドネシア・ムラボー	医師
2 2005年10月～12月	2カ月	緊急救援	パキスタン北部地震	パキスタン・アボタバード	医師
3 2005年11月～12月	2カ月	緊急救援	パキスタン北部地震	パキスタン・イスラマバード	事務職員
4 2005年11月～12月	2カ月	緊急救援	パキスタン北部地震	パキスタン・イスラマバード	事務職員
5 2006年5月～6月	1カ月	緊急救援	ジャワ中部地震	インドネシア・ジョグジャカルタ	医師
6 2006年7月～2007年2月	6カ月	復興支援	スマトラ沖地震	スリランカ・コロombo	事務職員
7 2006年8月	1カ月	難民支援	タンザニア難民支援	タンザニア・ルゴワ	看護師
8 2006年11月～2007年5月	6カ月	開発協力	フィリピン保健医療支援	フィリピン・キリノ	看護師
9 2006年12月～2007年2月	2カ月	緊急救援	ケニア洪水	ケニア・ガルセン	看護師
10 2006年12月～2007年1月	1カ月	緊急救援	ケニア洪水	ケニア・ナイロビ	検査技師
11 2006年12月	1週間	緊急救援	フィリピン台風被害	フィリピン・アルバイ	看護師
12 2007年5月～7月	2カ月	開発協力	インドネシア医療支援	インドネシア・ボゴール	医師
13 2008年1月～12月	12カ月	復興支援	スマトラ沖地震復興支援	スリランカ・プッタラム	看護師
14 2008年6月	10日間	事業調査	スマトラ沖地震復興支援調査	スリランカ・プッタラム	医師
15 2008年6月	10日間	事業調査	スマトラ沖地震復興支援調査	スリランカ・プッタラム	看護師
16 2008年6月	10日間	事業調査	スマトラ沖地震復興支援調査	スリランカ・プッタラム	事務職員
17 2008年5月～6月	2カ月	緊急救援	中国四川省地震	中国・成都	事務職員
18 2008年12月～2009年1月	1カ月	緊急救援	ジンバブエ・コレラ禍	ジンバブエ・カロイ	事務職員
19 2009年1月～2月	1カ月	緊急救援	ジンバブエ・コレラ禍	ジンバブエ・カロイ	医師
20 2009年1月～2月	1カ月	緊急救援	ジンバブエ・コレラ禍	ジンバブエ・カロイ	看護師
21 2009年3月	10日間	事業調査	ネパール山岳部保健調査	ネパール・ラスワ	医師
22 2009年3月	10日間	事業調査	ネパール山岳部保健調査	ネパール・ラスワ	看護師
23 2009年3月	10日間	事業調査	ネパール山岳部保健調査	ネパール・ラスワ	事務職員
24 2009年2月	2週間	開発協力	インドネシア医療支援	インドネシア・ボゴール	医師
25 2009年4月	3週間	開発協力	北イラク戦傷外科病院支援	イラク・アルビル	医師
26 2009年4月～12月	7カ月	復興支援	バングラデシュ・サイクロン被害	バングラデシュ・ボリシャル	看護師
27 2009年7月	9日間	事業調査	バングラデシュ・サイクロン被害調査	バングラデシュ・ボリシャル	医師
28 2009年7月	9日間	事業調査	バングラデシュ・サイクロン被害調査	バングラデシュ・ボリシャル	看護師
29 2009年7月	9日間	事業調査	バングラデシュ・サイクロン被害調査	バングラデシュ・ボリシャル	事務職員
30 2009年12月～2010年6月	6カ月	その他	アジア太平洋地域事務所活動支援	マレーシア・クアラルンプール	事務職員
31 2009年11月	10日間	事業調査	ウガンダ内戦復興支援調査	ウガンダ・カロンゴ	医師
32 2009年11月	10日間	事業調査	ウガンダ内戦復興支援調査	ウガンダ・カロンゴ	事務職員
33 2010年1月～2月	1カ月	緊急救援	ハイチ大地震	ハイチ・ポルトープランス	医師
34 2010年1月～2月	1カ月	緊急救援	ハイチ大地震	ハイチ・ポルトープランス	看護師
35 2010年1月～3月	3カ月	緊急救援	ハイチ大地震	ハイチ・ポルトープランス	事務職員
36 2010年2月～3月	2カ月	緊急救援	ハイチ大地震	ハイチ・ポルトープランス	医師
37 2010年2月～3月	1カ月	緊急救援	ハイチ大地震	ハイチ・ポルトープランス	看護師
38 2010年2月～3月	1カ月	緊急救援	ハイチ大地震	ハイチ・ポルトープランス	看護師
39 2010年2月～3月	1カ月	緊急救援	ハイチ大地震	ハイチ・ポルトープランス	事務職員
40 2010年4月～5月	1カ月	緊急救援	ハイチ大地震	ハイチ・ポルトープランス	事務職員
41 2010年4月～7月	3カ月	復興支援	ウガンダ内戦復興医療事業	ウガンダ・カロンゴ	医師
42 2010年6月～2011年1月	7カ月	緊急救援	パキスタン北部紛争	パキスタン・ベシヤワール	看護師
43 2010年8月～9月	1カ月	復興支援	ハイチ大地震復興支援	ハイチ・ポルトープランス	事務職員
44 2010年8月～9月	1カ月	緊急救援	パキスタン洪水	パキスタン・カラチ	看護師
45 2010年8月～9月	3週間	緊急救援	パキスタン洪水	パキスタン・イスラマバード	事務職員
46 2010年8月～10月	3カ月	緊急救援	パキスタン洪水	パキスタン・ラルカナ	事務職員
47 2010年10月～2011年1月	4カ月	復興支援	ウガンダ内戦復興医療事業	ウガンダ・カロンゴ	医師
48 2010年11月～2011年2月	3カ月	緊急救援	ハイチ・コレラ禍	ハイチ・ポルトープランス	事務職員
49 2011年1月～2月	1カ月	緊急救援	ハイチ・コレラ禍	ハイチ・ポルトープランス	看護師
50 2011年1月～2月	1.5カ月	復興支援	ウガンダ内戦復興医療事業	ウガンダ・カロンゴ	医師
51 2011年1月～7月	7カ月	復興支援	ハイチ大地震復興支援	ハイチ・レオガン	看護師
52 2011年10月～12月	1.5カ月	復興支援	ウガンダ内戦復興医療事業	ウガンダ・カロンゴ	医師
53 2011年12月	9日間	事業調査	ウガンダ北部母子保健/病院支援	ウガンダ・カロンゴ	医師
54 2012年2月～2013年3月	13カ月	復興支援	ハイチ大地震復興支援	ハイチ・レオガン	看護師
55 2012年2月	10日間	復興支援	ウガンダ内戦復興医療事業	ウガンダ・カロンゴ	事務職員
56 2012年3月	1カ月	復興支援	ウガンダ内戦復興医療事業	ウガンダ・カロンゴ	医師
57 2012年5月～7月	3カ月	復興支援	ウガンダ内戦復興医療事業	ウガンダ・カロンゴ	医師
58 2012年10月	10日間	復興支援	ウガンダ内戦復興医療事業	ウガンダ・カロンゴ	事務職員
59 2012年9月～2013年10月	13カ月	復興支援	ハイチ大地震復興支援	ハイチ・レオガン	看護師
60 2012年9月	2週間	開発協力	ネパール給水衛生事業	ネパール・カトマンズ	看護師
61 2012年10月～12月	3カ月	復興支援	ウガンダ内戦復興医療事業	ウガンダ・カロンゴ	医師
62 2012年11月～12月	9日間	事業調査	ウガンダ内戦復興医療事業	ウガンダ・カロンゴ	医師

派遣期間	活動形態	災害／事業名	派遣地	派遣者職種		
63	2012年11月～12月	16日間	事業調査	ウガンダ内戦復興医療事業	ウガンダ・カロンゴ	事務職員
64	2013年3月	6日間	事業調査	ベトナム医療支援事業	ベトナム・ハノイ	医師
65	2013年3月	6日間	事業調査	ベトナム医療支援事業	ベトナム・ハノイ	検査技師
66	2013年3月～5月	2.5カ月	復興支援	ウガンダ内戦復興医療事業	ウガンダ・カロンゴ	医師
67	2013年7月～9月	2カ月	復興支援	ウガンダ内戦復興医療事業	ウガンダ・カロンゴ	医師
68	2013年9月～10月	10日間	開発協力	バングラデシュ給水衛生事業	バングラデシュ・ダッカ	臨床工学技士
69	2013年10月～11月	1カ月	復興支援	ウガンダ内戦復興医療事業	ウガンダ・カロンゴ	医師
70	2013年10月～2014年1月	4カ月	復興支援	ウガンダ内戦復興医療事業	ウガンダ・カロンゴ	医師
71	2013年10月	3週間	事業調査	ウガンダ内戦復興医療事業	ウガンダ・カロンゴ	看護師
72	2013年10月～2015年10月	24カ月	開発協力	東ティモール赤十字社組織強化事業	東ティモール・デシリ	事務職員
73	2013年11月～2014年9月	9カ月	その他	アジア太平洋地域事務所活動支援	マレーシア・クアラルンプール	事務職員
74	2013年12月	2週間	復興支援	ウガンダ内戦復興医療事業	ウガンダ・カロンゴ	事務職員
75	2013年12月～2014年1月	1カ月	緊急救援	フィリピン中部台風被害	フィリピン・セブ島	看護師
76	2014年1月～2月	1カ月	緊急救援	フィリピン中部台風被害	フィリピン・セブ島	臨床工学技士
77	2014年2月～6月	3カ月	復興支援	ウガンダ内戦復興医療事業	ウガンダ・カロンゴ	看護師
78	2014年3月～9月	6カ月	開発協力	フィリピン保健医療支援	フィリピン・キリノ	看護師
79	2014年4月～7月	3カ月	復興支援	ウガンダ内戦復興医療事業	ウガンダ・カロンゴ	薬剤師
80	2014年5月	1カ月	復興支援	ウガンダ内戦復興医療事業	ウガンダ・カロンゴ	医師
81	2014年8月～2015年8月	12カ月	復興支援	ハイチ・コレラ衛生促進事業	ハイチ・ポルトープランス	事務職員
82	2014年8月～11月	3カ月	緊急救援	シリア難民救援事業	レバノン・トリポリ	看護師
83	2014年12月	2週間	復興支援	ウガンダ内戦復興医療事業	ウガンダ・カンパラ	事務職員
84	2014年12月	10日間	緊急救援	フィリピン台風救援事業	フィリピン・サマル島	看護師
85	2015年1月～5月	4カ月	復興支援	ウガンダ内戦復興医療事業	ウガンダ・カロンゴ	医師
86	2015年1月～6月	5カ月	復興支援	ウガンダ内戦復興医療事業	ウガンダ・カロンゴ	看護師
87	2015年2月	2週間	事業調査	東ティモール衛生教育事業調査	東ティモール・デシリ他	医師
88	2015年2月	2週間	事業調査	東ティモール衛生教育事業調査	東ティモール・デシリ他	看護師
89	2015年2月	3週間	事業調査	ウガンダ内戦復興医療事業評価	ウガンダ・カロンゴ	薬剤師
90	2015年2月～3月	3週間	事業調査	ウガンダ内戦復興医療事業評価	ウガンダ・カロンゴ	看護師
91	2015年4月～5月	2週間	緊急救援	ネパール地震救援事業	ネパール・メラムチ	医師
92	2015年4月～5月	3週間	緊急救援	ネパール地震救援事業	ネパール・メラムチ	事務職員
93	2015年4月～6月	2カ月	緊急救援	ネパール地震救援事業	ネパール・メラムチ	看護師
94	2015年4月～6月	1.5カ月	緊急救援	ネパール地震救援事業	ネパール・メラムチ	看護師
95	2015年4月～6月	1.5カ月	緊急救援	ネパール地震救援事業	ネパール・メラムチ	薬剤師
96	2015年6月～8月	2.5カ月	緊急救援	ネパール地震救援事業	ネパール・メラムチ	医師
97	2015年6月～7月	1.5カ月	緊急救援	ネパール地震救援事業	ネパール・メラムチ	臨床工学技士
98	2015年7月～8月	5週間	緊急救援	ネパール地震救援事業	ネパール・メラムチ	事務職員
99	2015年9月～2016年3月	6カ月	復興支援	フィリピン中部台風復興支援事業	フィリピン・セブ島	事務職員
100	2015年10月～2016年3月	5カ月	復興支援	ウガンダ内戦復興医療支援事業	ウガンダ・カロンゴ	看護師
101	2015年10月～2016年1月	3カ月	緊急救援	シリア難民救援事業	レバノン・トリポリ	看護師
102	2015年11月	2週間	その他	ウガンダ内戦復興医療支援事業	ウガンダ・カロンゴ	看護師
103	2015年11月～12月	5週間	復興支援	ウガンダ内戦復興医療支援事業	ウガンダ・カロンゴ	医師
104	2015年10月～2016年1月	2カ月	復興支援	ウガンダ内戦復興医療支援事業	ウガンダ・カロンゴ	医師
105	2015年11月～2016年1月	2カ月	緊急救援	南スーダン紛争犠牲者救援事業	南スーダン・ジュバ他	医師
106	2016年3月	2週間	事業調査	ウガンダ内戦復興医療支援事業	ウガンダ・カロンゴ	医師
107	2016年3月	2週間	復興支援	ウガンダ内戦復興医療支援事業	ウガンダ・カロンゴ	事務職員
108	2016年4月～2016年10月	6カ月	開発協力	ケニア地域保健強化事業	ケニア・ナイロビ他	事務職員
109	2016年4月～2017年4月	13カ月	難民支援	中東地域紛争犠牲者支援事業(ヨルダン)	ヨルダン・アンマン他	事務職員
110	2016年5月～7月	2カ月	難民支援	パレスチナ紛争犠牲者救援事業	パレスチナ・ガザ	医師
111	2016年8月～10月	2カ月	難民支援	中東地域紛争犠牲者支援事業(ギリシャ)	ギリシャ・テッサロニキ	医師
112	2016年9月～12月	3カ月	復興支援	フィリピン中部台風復興支援事業	フィリピン・セブ島	事務職員
113	2016年9月	2週間	事業調査	パレスチナ難民救援事業	パレスチナ・ガザ他	看護師
114	2016年10月	2週間	事業調査	パレスチナ難民救援事業	レバノン・ベイルート他	医師
115	2017年2月～3月	5週間	緊急救援	イラク紛争犠牲者救援事業	イラク・アルビル/モスル	医師
116	2017年2月～3月	2週間	事業調査	パレスチナ難民救援事業	レバノン・ベイルート他	看護師
117	2017年2月～3月	3週間	事業調査	パレスチナ難民救援事業	レバノン・ベイルート他	医師
118	2017年3月～9月	6カ月	緊急救援	南スーダン紛争犠牲者救援事業	南スーダン・ジュバ	看護師

●本院職員のこれまでの派遣地 ※赤字は、2016年度の派遣地です。



2017年より、中東人道危機に対する医療支援を開始します

現在、中東はイスラエルとパレスチナの諸問題に加え、アラブの春に始まる多くの国での混乱や多数の難民など、残念ながらまさに人道危機のデパートのような状態にあります。日本赤十字社ではこの人道危機に対して、これまでシリア難民への水と衛生の支援や、保健活動、パレスチナ難民への医療資機材提供など、さまざまな支援を行ってきましたが、2017年度より、パレスチナとレバノンにおいて、パレスチナ難民を対象に病院支援プロジェクトを開始することになりました。本院が国内デスクとなり、日本全国の日赤病院から医師、看護師を派遣して現地の病院支援を行うプロジェクトです。

中東は、いわゆる途上国ではありません。したがって今までわれわれが行ってきた東南アジアやアフリカでの医療支援などとはかなり様相が異なります。また、中東という場所がら、独特の文化や安全面にも気を配らなければなりません。

第二次大戦後からほぼ70年間難民生活を送っているパレスチナ人を支援するというのは簡単ではありません。「からだ」と「こころ」の両面からパレスチナ人を癒せるような、息の長い支援を行うことができると考えています。





ローカルマーケット

Let's Enjoy! ナースのための海外スタディツアー

スタディツアーとは、全国の看護師を対象に、日赤の看護師が活動する海外の事業地を訪問し、国際救援活動の実際と異文化に触れてもらうというもので、本院の主催で2015年から開始しています。2016年はフィリピンで10日間のツアーを行いました。うれしいことに赤十字以外の病院も含めて全国から多くの応募があり、その中から、計6人の看護師・助産師の方々に参加していただきました。

訪問したのはフィリピンのセブ島北部のダアンバンタヤン郡です。2013年にフィリピンは、スーパー台風「ハイヤン」により甚大な被害を受け、この地域で日赤は緊急対応ユニット(以下ERU)を展開し、医療救援活動を行いました。その後、復興支援事業として、保健医療・防災・生計支援などの活動を行っています。ただ、日本の病院で働く看護職には、保健事業は縁遠いもので、学生時代に学んだ記憶は遙かかたに霞んでいます。参加者にツアーを本当に楽しんでもらえるのか非常に心配でした。

ツアーの内容は、できるだけ活動地やそこで暮らしている人々の様子を実際に目で見て肌で感じてもらうことに重点をおきました。例えば、発災後実際に日赤が診療所を立てた土地を訪問し、どこに診療所を立てるのかと、場所の選定を行ってもらいました。また、フィリピンのご家庭を訪問してインタビューを行い、どのような健康問題があるのかを考えてもらいました。許可をいただいたお宅に訪問する予定だったのですが、それ以外の住民の方々が自らインタビューに応じてくださるなど、突撃インタビューになってしまうなどのハプニングもありました。普段の日赤要員、フィリピン赤十字社スタッフやボランティアへの信頼が感じられた出来事でもあります。



オフィスで話し合い

ツアーの最初の頃には参加者に戸惑いも見られましたが、最終的には得るものも多く、有意義なツアーとなったようです。

違う国のさまざまな文化に触れてもらう機会を作るためにも、このスタディツアーは今後も継続していく予定です。



朝のミーティング



住民の血圧測定



ズンバ(ダンス)の体験



小学校での防災訓練で救急処置のアドバイス



フィールドアセスメントで家庭を訪問



最後の夜、フィリピン赤十字の若手スタッフと

本院職員から（国内救護編）～すべては被災者のために～

看護師



東日本大震災・熊本地震で派遣されました。災害救護は限られた時間・もの・人のなかで困難も多くありますが、臨機応変な対応や判断力が求められる活動には、大きな学びとやりがいを感じています。災害なんて起こらないほうがいいと常に願っていますが、災害時にその人がその人らしく生き、安心できる看護ができれば、そして、これらの経験から学んだことを後輩に伝えていければと自己研鑽の日々です。

臨床検査技師



普段は臨床検査技師としてエコー室で勤務しています。被災地に派遣された際には、下肢血管エコーを数件実施したり、事務関連の仕事をしたりしていました。当初は事務としての活動はそんなにあるのだろうかと思っていましたが、実際はやるべきことが多く、思っていた以上に重要な職種だと感じました。また、われわれの姿が目に入るだけでも少しは被災者の支えになるということも実感し、職種に関係なく力になれる存在だと思いました。

診療放射線技師



阪神・淡路大震災、あれから22年。あのとき初めて救護班の一員として参加しました。自分にできることが何かあるのかなと思っていたとき、事務要員として要請があり、1月の寒い朝早く救急車に救護班を乗せて運転したことを覚えています。それが今では当院に災害用エックス線撮影装置が導入され、2016年4月の熊本地震では南阿蘇村の救護班に「放射線技師」として5名もの技師が約1カ月の間救護活動を行いました。これからも多くの若い力が必要です。ぜひ、一緒に活動しませんか。

医師



東日本大震災、熊本地震にて救護活動を行いました。「何かしたいけれども何もできない」と大勢の方が葛藤しているなかで救護員として参加できること、サポートしてくれる職場環境にいることはありがたいことだと毎回感じます。現場では診断機器や薬剤のない状況で、重症化させない初期対応が求められます。ひとりでは無力ですが、多くの人の「連携」が「さざ波」のように広がり、諸問題を解決していく様子は素晴らしい体験です。ぜひ、一緒に活動してもらえたらと思います。

臨床心理士



普段は病院の心理士として働いています。病気と同様、災害も突然誰にでも起こります。そのときに少しでも力になればと、台風や地震災害で医療救護班のこころのケア担当として活動しました。初めての活動のときは、何もわからずに先輩の看護師の方に支えられました。これからは災害救護の経験を活かし、回復や復興の手助けになれるよう、気持ちに寄り添いながら、不安を軽減するかわりを常に考えていきたいと思っています。

薬剤師



熊本地震の災害救護では、調剤や医薬品管理をはじめ医師への処方支援や被災地保険薬局との調整、常用薬の確認や代替薬の提案と、薬剤師としての役割は多岐にわたりました。災害時における薬剤師の役割は、東日本大震災、熊本地震と救護活動を重ねる毎に増えてきており、やりがいを感じます。このように薬剤師という専門性を災害救護の分野でも活かせることができるのは本院の大きな魅力です。

助産師



助産師として働きながら、災害医療や災害看護、救急法やこころのケアなどさまざまな院内研修を受けました。その後2011年に起きた東日本大震災では、宮城県へ救護班として派遣され、3年後の2014年には、中長期支援として、福島県いわき市に避難している浪江町民の健康調査・支援活動を行いました。被災地の現状や残された問題、復興にかける人々の思いなど実際に目の当たりにし、何が必要な支援なのか、継続性は、などを限られた時間のなかで判断することの難しさを学びました。

看護師



熊本地震では初動班で出勤、活動拠点決定まで想像以上に時間がかかり、混乱する現場で情報を集める大変さを目の当たりにしました。避難所では被災者の方の言葉に耳を傾けるように心がけ、メンバー間で情報共有を行い、衛生活動や支援提供に役立てることができました。尊敬できるメンバーから学びながら貴重な経験をさせていただきました。

理学療法士



私が大阪赤十字病院に入職後に発生した阪神大震災の経験は、被災した人たちに何らかの助力として働くことができないかを考えるきっかけとなりました。その後、東日本大震災、熊本地震と大きな災害における救護事業にかかわることができました。自分の幸せだけを考える人も多い世の中、自分の時間をほんの少しだけ、助けが必要な人と共有する貴重な経験、本院は全職員にその可能性を広げています。

事務管理要員



2009年、兵庫県佐用町水害の救護活動が初めての派遣でした。車両操作や情報収集、連絡・調整など、事務職員が重要な任務を担っていることを実感しました。また、被災地で活動するたび人間の強さとやさしさを感じ、いろいろなことを学びました。今後も、訓練や研修会に積極的に参加し、強い使命感と責任感を持って活動できるよう努力するとともに、この貴重な経験を人材育成に役立てていきたいと思っています。

看護師



救急認定看護師として救急部で勤務しています。熊本地震時、熊本赤十字病院に派遣となりました。スタッフも被災者であるなか、震災で受傷された患者さんの看護を行っている赤十字スタッフを見て多くのことを学びました。これからも多くの現場で経験を重ね、救急の現場や患者さんに還元できるようがんばりたいと思います。派遣にあたり、救急部スタッフが快く勤務調整して派遣に参加させていただける環境に感謝しています。

医師



通常は呼吸器外科医として業務に就いています。救護活動では2011年の東日本大震災、また、2016年の熊本地震でそれぞれ初動班として活動に参加しました。これらの活動を通じて感じることは、大阪赤十字病院の迅速な対応とバックアップ体制のすばさです。活動に必要な物資の充実や、通常業務を託せる人的パワー、それに加え全国の赤十字との連携などは、他施設では絶対に味わえません。

看護師



昨年4月に熊本地震へ救護員として派遣されました。初めての救護活動で不安もありましたが、たくさんの貴重な体験をさせていただいたと思います。臨機応変に対応することや、チームワークの大切さも実感しました。また、病棟スタッフからも応援の言葉をいただいたり、勤務を代わっていただいたりするなど、たくさんの方々の協力があり、安心して救護に行くことができました。

看護師



普段は病棟に勤務していますが、災害時は赤十字看護師として救護活動を行います。東日本大震災や熊本地震では、多くの方に支えられながら、被災地で救護員やこころのケア要員として活動しました。救護活動は日頃行っている医療や看護に通じるものであり、その応用編だと思えます。日々、自己研鑽に努めながらこの被災地での経験を活かして、災害看護の教育・指導に携わり、今後の災害に備えたいと思います。

看護師



就職したときより救護員教育は受けてきましたが、結婚・育児などで派遣機会がないまま20年という期間が開いてしまい、不安ななかでの派遣となりました。しかし、今までの看護師経験と実践的な研修プログラムのおかげで、災害現場でも赤十字看護師としての役割と任務を理解して活動することができました。この経験からの学びを次の救護員スタッフへつなげるとともに、私自身も活動を続けていきたいと思っています。

診療放射線技師



救護員として災害現場へ派遣され、「人間を救うのは人間だ」という赤十字精神を肌で感じると同時に、災害活動を通して職種を超えたチームワークを実感しました。診療放射線技師という技術を活かし、より迅速かつ高度な災害医療につながるよう活動しています。これからも災害と向き合う一人ひとりの生活と尊厳を守る力になれるよう活動していきたいと思っています。

看護師



2016年5月に第7班として熊本へ派遣され、救護活動を行いました。現地では他の赤十字施設のメンバーとチームを組み活動しました。初めての救護活動でわからないことはばかりでしたが、メンバー全員で人道的任務が達成できるよう丸となって活動してきました。普段から、救護員養成研修やさまざまな訓練に参加できる環境も整っており、災害救護活動に興味のある方にとって、当院は最適な環境です。

事務管理要員



これまで新潟中越、中越沖地震、東日本大震災、熊本地震などで救護活動に協力させていただきました。現地に直接行くことにより、テレビを見ても感じるののできない街の状況や、被災者の方々の状況を直接見ることで、多くのことが感じられ、貴重な経験となりました。事務職の役割も多く、やりがいも感じる事ができると思いますので、救護活動に興味のある方は一緒にがんばりましょう。

臨床検査技師



普段は、臨床検査技師として検査（感染症検査や感染管理が主な業務）に従事していますが、東日本大震災が発生したときは事務職員の任務で被災地に赴きました。赤十字としての救護活動は、ボランティア活動やその他の救護組織とも違う性格を有しており、現地での活動は責任・行動・意志などさまざまなことを考えさせられる経験でありました。当時の経験は、今でも自分自身にとって教訓として生きています。

看護師



災害医療は、時間とともにニーズが変化するので、アセスメントをしっかりと対応していく必要があることを、活動を通して考えました。赤十字のマークで人々に安心してもらえることを実感し、災害医療に責任をもって活動できる人材育成をがんばっていききたいと思います。

事務管理要員



当院に就職して4年目に阪神・淡路大震災が発生、初めて被災地に派遣されました。現地に入ると建物は崩壊し、また、横倒しになっている高速道路を目の当たりにして大きな衝撃を受けましたが、気持ちを引き締め救護所で医療スタッフの診療補助業務に携わりました。普段は当院の事務職員として仕事をしていますが、大規模災害等が発生した際は当院医療チームの一員として被災地に赴き救護活動にあたることになります。

薬剤師



阪神・大震災時は出勤できない神戸赤十字薬剤部員の代わりとして、東日本大震災時は救護の経験者として、事務管理を行う要員で派遣されました。今では薬剤師も救護チームに配属されていますが、当時は薬剤師は配属されていませんでしたので薬剤師の業務以外何をすればよいのかわかりませんでした。少ない人数でお互い協力し合って業務を行うことは、よい経験になりました。薬剤師としてだけでなく医療に携わる者として多くのことを学びました。

医師



私は昨年熊本地震に出勤したのが救護班として初の活動でした。東日本大震災の際は自身の転勤と重なり行くことができなかったため、今回はぜひ行きたいという思いがすぐに湧いてきました。私が行ったときにもまだ余震が続くなか、多くの方が避難所で不安な毎日を過ごされており、赤十字の制服を見て安心した表情をくださるのを見ると、科や職種を超えて自分たちができること、やるべきことがたくさんあるのだと実感する日々でした。

看護師



2016年5月に5日間、熊本県南阿蘇村へ派遣されました。日々状況が変わる被災地で、今一番何が必要なのか被災者の思いを、ともに救護活動をしているスタッフと考え、次の班へとつなぐことができました。不安もたくさんありましたが、病棟のスタッフが温かく送り出してくれたので、精一杯できることを行ってきました。この貴重な経験を多くのスタッフへ伝え、普段の看護実践にも役立てていきたいと思っています。

臨床工学技士



熊本地震の際に、初動班の一員として南阿蘇で活動してきました。初動班の最大のミッションは、被災地でdERU（国内型緊急対応ユニット）テントを展開し、仮設診療所を開設することです。当院のdERUには外来棟だけでなくレントゲン室や手術室もあり、取り扱う医療機器は数多く存在します。医療機器に関する専門知識を持った臨床工学技士にも活躍の場があることを改めて実感しました。

医師



1995年の阪神・淡路大震災では、発災直後から3月半ばまで、当院から54チームを現場に派遣、224名の被災者をへり搬送、当院に受け入れました。その後、JR福知山線列車事故、新潟の2回の地震や東日本大震災など多くの災害で救護活動をしてきましたが、阪神大震災のときに身にしみて感じた、完全な自己完結で行かなければ役に立たないということが、以来当院の救護体制の軸となっています。



大阪赤十字病院 国際医療救援部
〒543-8555 大阪市天王寺区筆ヶ崎町5-30
TEL:06-6774-5111(代表) FAX:06-6774-5131(代表)
<http://www.osaka-med.jrc.or.jp>